2023年1月1日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

向かい合って生きる

［ルカによる福音書2章40～52節］

幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された。

[１] 神の恵みに包まれる人生

皆様、新年おめでとうございます。1週間前の日曜日はクリスマスを祝う礼拝を捧げましたけれども、今日は新年の最初の日となりました。その日の朝をこのようにご一緒に礼拝を捧げることから始められることは本当に感謝なことだと思います。それは、私たちは、決して一人ぼっちではない、ということです。神様がおられ、神様に祈ることをもって新しい年を始める。昨年一年間のことを振り返っても皆さんも思うと思います。「祈らないではやってこれなかった」「覚えて頂いて、支えて頂いて、何とか歩いてくることが出来た」。それで良いのだと本当に思います。信仰が与えられているということ、また信仰生活の家としての教会が私たちに与えられているということは幸いなことだと思います。

新年最初の聖書の箇所は、「少年イエス様」のことが記されている所でした。これは四つの福音書の中でルカだけが記しています。ルカは、福音書としては唯一、赤ちゃんとして馬小屋の飼い葉桶に寝ているイエスを描いていました。そしてイエス様の「少年期」も描いているんです。2:40ではこう記しているのですね。「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。」この言葉は後でも触れたいと思いますが、とても大事なことを語っているように思います。もちろんイエス様のことなのですが、イエス様だけのことではないです。私たちの、命を宿す体は変化していきます。しかし、年を重ねるとは「成長する」ということです。何才になってもです。神様が、私たちに、無駄な、無益な「時」というのを与える、などということはないと私は思います。今日の聖書の中で、マリアがイエス様のことに理解が及ばなくなったように、御心が分からない、というようなことは沢山あると思いますけれども、私たちの人生は、聖書が言ってくれているように、「神の恵みに包まれていた（いる）」、そういう人生なんだと思うのです。

［2］ 新しい「信仰」への促し

イエス様は、今12才です。その当時はそう決まっていた訳ではなかったようですが、ユダヤ人は13才が、元服と言うか、成人式のようです（バル・ミツバ）。「大人」になるとは、律法を自分で学び、それを守ることが出来るようになるという考え方のようです。イエス様も、いきなり大人になったのではなく、幼い時代を過ごされ、様々なことを経験されて、周りの人を通して旧約聖書の律法も学ばれたのです。肉の父であるヨセフも幼いイエスに教えたに違いないでしょう。

今日の聖書の中で、イエス様のことを、律法の理解が早い、早熟な神童のように描写していて（46～47節）、私たちは、そりゃイエス様は神の子なのだからそうだろうと、あまり引っかからないで読んでしまうのですけれども、私はそういうことよりも、私たちにとって信仰とは何なのか、ということを知らされるように思います。イエス様は、ご自分を捜しにマリアたちが、心配をしたのよと言った言葉に対して、49節「わたしが自分の父の家いることは当たり前ではないですか」というように言われました。つまりイエス様は、あくまでも神様との関係の中で生きていた訳です。12才、もうそのような自立が起こっている。マリアたちの心配心も分からなくはないですが、それは、神様との関係の中の心配事というよりも、水平の次元の心配事です。ですから面白いのは聖書の表現です。44節で、両親はイエスが「道連れの中にいるものと思」っていたという表現や、「親類や知人の間を捜し回ったがみつからなかった」と表現されていますよね。言い替えれば、自分たちの知っている範囲、掌握している範囲の中にイエスはいる、いや、いなければいけないとどこかで思っていたのだと思います。けれども、今イエス様は、全ての人の救い主として十字架への道を歩み始める、水平の次元で把握は出来ないお方、信仰で受け止めなければ分からないお方としてのスタートがこの出来事の中にあった、ということではないかなと思います。それは更に言い替えると、マリアまたヨセフとっても、新しい「信仰」への促しになったのだと思います。ですから51節では「母はこれらのことをすべて心に納めていた」と書いてあります。以前の訳では「心に留めていた」です。神様に聞きながら思いめぐらしていたのですね。

［3］ 真っすぐに向かい合ってゆくために

イエス様の公の生涯は、次の章の3章のバプテスマの出来事から始まると言われます。おおよそ30才の時です。ですからそれ以前の12才の出来事はあまり注目されないということにもなるのかもしれませんが、私はこの12才の時のお話は良いなあ、と思うのですね。イエス様にも、ちゃんと子ども時代、少年時代があったのだなあ、と想像させてくれますから。先程私はイエス様は水平関係ではなく、自立して神様との関係の中に生き始めたのではと申しました。けれども、大事なことだなと思うことは、この時からイエス様がこの肉の両親を捨てた訳でもないと言うことです。むしろ、聖書は逆のことを言っているのです。51節の前半です。「それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。」神様との関係に生き始めたイエス様は、地上の愛の関係も大切にされたのですね。そして52節にはこうあります。「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された。」これは先ほどの40節の言葉と似ています。「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。」―神様の恵みに始まった「幼子」イエス様から始まった成長は、体も大きくなりましたが、神と人とに愛されたという、「愛を受ける」という形の成長が、人間イエス様にはあった。そしてなお、ナザレの村で大工の仕事を手伝いながら両親のもとで生活をなさった、ということですね。馬小屋で産声をあげ、ようやく歩き始め、走り出し、言葉を交わすようになり、そして神様との一対一の関わりの中に生きるようになったイエス様ですが、イエス様が自立するようになったのは、私は両親の愛のお陰といってもいいのではないかと思います。独りで、とっとこと神殿の中に入り、律法学者たちとやりとり出来ているというのは、イエス様がヨセフとマリアの愛を一杯に受けた幼年時代・少年時代を過ごしていたからではないでしょうか。おかしな言い方ですが、イエス様は、安心して「家出」しているのですよ。だから「父の家にいるのは当たり前じゃないですか」と言う。言うことが出来る。幸いな子供時代です。

私たちは2023年のそれぞれの歩みが始まりました。ご自分のこれからのことに少し不安を持たれている方もおられるかもしれません。私も不安がないと言ったらウソになります。生活の中で色々あります。家族のこと、教会のこと、自分の働きのこと。でもそんな自分も支えられていると思えるのは、ある意味幸福な子供時代の部分が今の自分を支えてくれているからなのかも知れません。ただ愛を呼吸して生きていた幼い時代を少しでも振り返ることが出来る人は幸いです。私たちは究極的には神様の愛があれば生きて行ける存在だと思いますが、愛が何であるのか、それをまず会得させてくれるのは、理屈を超えた親の愛、またそれに替わる人の存在の愛なのではないでしょうか。

上智大学の教授で武田なほみさんという生涯発達心理学の教授の方が、認知症になられたお母様を介護されて発見して事があるとおっしゃっていました。お母様（音楽家）が何度も何度も繰り返し話をされることがある、それは自分がどれほど音楽家として活動してきたかということではなく、戦争の時代、親が自分のことを大切な存在として守ってくれたこと、応援してくれたことなんですと。つまり、活動的なこと、頑張ったことが残るのではなくて、自分が愛されていたということがその人を深い所で支えるのだ、ということなんだなと。

イエス様も、神様だけじゃない、人にも愛されたのです。人間の愛も大事なのです。クリスチャンはともすると、神様の愛だけになり易い。しかしそれだけになると、どこか冷ややかになってしまいます。当時の律法学者がそうだったじゃないですか。最も大事なことは「主を愛し、また、あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」ですよね。神様が何とかしてくれる。それはそうかもしれない。でも、もし身近で困っている者がいたら、向かい合わなきゃ。スルーばかりして信仰者といえるかどうか。先程マリアはイエス様の言葉を受けて「思いめぐらしていた」のだと言いました。私は、マリアはこの日からイエス様と一対一の関係、向かい合う関係になったのだと思いました。これまでは、自分の支配下のイエス様、「分かっているイエス様」だった。それでは本当の信仰になりませんよね。「自分の知らないイエス様」そして「自分の知らないあの人この人」と出会って行きたいと思います。「あ、あの人はこうだから」と決めつけることはやめたいと思います。いつも、受け容れる愛を持って、初めて出会うような驚きや優しさ、寛容さを持っていたいと思います。だって、イエス様は、私たち人間を丸ごと愛し、私のために、あなたのためにいのちを投げ出して下さったお方じゃないですか。お互い、神様に真っすぐに向かい合って、また、身近な者にこそ、思い込みをせず、スルーせず、向かい合って行きたいと思います。そこに神様の祝福が必ず注がれていると思います。お祈り致します。

神様、ご一緒にこの年も、あなたが与えてくれる約束の日に向かって誠実に歩むことが出来ますように。あなたと向き合い、また信仰の仲間、そして身近な者たちとも向き合って生きて行くその柔軟な心を与えて下さい。皆さんお一人お一人にこの年も主の十字架と復活の確かな愛が支えとなりますように。そのあなたを信頼致します。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。